長良川上空に ドローンの〝道〟

県、美濃市で物流実証実験

県とドローン各種事業を手がけるROBOZ（恵那市）は19日、美濃市の長良川上空をルートとしたドローン物流の実証実験に取り組んだ。同市の長良川は水難事故多発地点のため、水難事故を想定した救援物資の運搬を実施。2・6㌔の距離を途中、操縦者を切り替えながら飛行した。（佐名妙予）

救助で使うブイを空輸するドローン。中継点で別の機体に移し替えた＝美濃市前野、長良川河川敷

水難事故想定、救援物資運搬

国土交通省の実証実験の一環で全国の18カ所で実施。ドローン物流のルートとして落下しても人身事故になりにくく、障害物も少ない河川上空に注目が集まっている。

飛行区間は美濃市の長良川と板取川の合流点を出発点に同市の美濃橋下流に至る2・6㌔。ドローンは2機使用し、重量物の運搬が可能な機体と物のつり下げができる特殊な機能を持つ機体を選んだ。

輸送は2回あり、1回目は、川面に浮かべる重さ約300㌘のブイを運搬。1機目は離陸して約10分ほどで中継地点に着陸。ブイを2機目に載せ替え、近くの目標地点に置いた。2回目は川で救助を待つ人に温かい飲料を運ぶ想定で、1機目が水筒に入った湯や食品を箱に入れ運搬。同社社員が中継地点で水筒の湯でコーヒーを作り、ドローンが数十㍍先の対岸に運んだ。

今回の飛行は距離が長く電波が途絶する懸念があったため、経路の途中で操縦者を切り替える機能を使った。また、飛行計画作成に伴い、県が河川管理で利用する3次元測量データを活用。川の地形や上空の障害物を事前に把握し、安全な飛行につなげた。実験後、同社の石田宏樹社長は「おおむね予定通りの飛行ができた」と手応えを語った。県河川課職員の伊藤祐輔さんは「河川上空を飛行するために必要な一連の手続きを具体的に洗い出すことができた。今回の情報をきちんと国に伝えたい」と語った。

県によると来年1月以降、国に実験結果を報告し、意見交換を行う。国側は全国から集まったデータを基に上空飛行のルール作りなどを検討する。

無断複製・転載を禁じます